

Title	国際文化祭ジャナドリヤからみたサウジアラビア文化とイスラーム
Author(s)	葛西, 賢太
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 81-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/17328
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

国際文化祭ジャナドリヤからみたサウジアラビア文化とイスラーム

葛西 賢太*

Saudi Arabian Culture and Islam: reflection on the Al-Janadriyah, the International Cultural Festival of Saudi Arabia

KASAI Kenta



リヤドのナショナル・ミュージアム入り口。ドミノのように並ぶオブジェは、サウジ各地の扉の様式を比較させ、各地での王室の事績をも示している。

1. ジャナドリヤ、日本特集

ジャナドリヤとは、1985 年以後毎年行われている、サウジアラビアの国民的・国際的文化祭典である。サウジの広い国土全体から各地の文物や農産物が集まり、人や歴史に触れる機会であり、名物のラクダレースや文化シンポジウムもある。筆者はこの文化シンポジウムの発題者のひとりとして光栄にも招かれ、日本とサウジとの関係、そして、東日本大震災、という、二つのテーマについてのシンポジウムでお話しさせて頂いた。このシンポジウムについては、すでに私の所属する宗教情報センターのサイトにて報告を載せている [葛西 2011、<http://www.circam.jp/page.jsp?id=1751>] ので、ご覧頂きたい。ここでは、『宗教と社会貢献』の読者が、イスラームと福祉、イスラームと社会貢献というテーマをお考え頂くための一つの素材になればと思い、私が現地で見えたサウジアラビア文化やイスラームの多様性について報告する。

なお、イスラームという宗教の社会貢献について一般論として問われる

* 葛西賢太・宗教情報センター研究員・ktkasai@nifty.com

ならば、クルアーンの一節（牝牛章 177 節など）を引用し、相互扶助が重視されていると言及すれば終わるかもしれないが、現場の文脈が必要だろう。近代西洋の政教分離下の宗教の社会貢献と、イスラームの聖地の守護者として、そして石油資源を手中に収めるサウジの国王が慈父による保護として展開する福祉事業と、その中で宗教の社会貢献とは、自ずと性格が異なるものになるのはまちがいない。本号では高尾賢一郎氏がシリアのグランドムフティの社会貢献を問うた論文を寄稿されており、また、前号でイランの事例についての細谷幸子氏の研究を私が書評している。両者のフィールドの違いをみた私は、一度の訪問でサウジの「宗教と社会貢献」について述べるのは難しいと実感する。「社会貢献」以前の話となること、お許し頂きたい。なお保坂 [1994] はイスラームにおける乞食と喜捨を考えるために示唆的な好著である。

サウジでは、ワッハブ派という厳格に保守的なイスラームを信奉し、メッカとメディナという、イスラームの二つの聖地を擁する。国王はこの二聖地にある二つのモスクの守護者である。年に一度、ジェッダを經由して世界中からムスリム・ムスリマ（女性のイスラーム教徒）が待ちに待った巡礼に訪れる。この巡礼も、誰でもいつでも行っていいわけではなく、順番まちなのだ。巡礼という正統な目的を持たない非ムスリム（非イスラーム教徒）にとって、サウジアラビアはさらに入国が容易でない国である。そして、非ムスリムである私は、メッカやメディナを訪れることは許されない。ジャナドリヤは、その私が一望の下にサウジを見られた（ような気持ちになれる）好機であった。今年はずっと日本に焦点を当てる回だということが、震災の前から決まっていた。ジャナドリヤ祭は 2 月に予定されていたのが、震災直後の 4 月へと、サウジ国内の都合で変更になっている。これらは偶然なのかもしれないが、今回の日本特集、また、今後のサウジアラビアと日本との関係に、別の意味を加えるものとなると思われた。

日本は、非西欧で植民地化を経験していない数少ない国であり、また、戦後の復興ぶりは世界各地の人々にたいへん強い印象を残した。イスラーム世界からも日本への関心は高く、それを支える理念として、古くは NHK の朝ドラマ『おしん』が愛され、また最近では『ハワートル（改革）』というテレビ番組で、置き忘れた財布が交番に届けられることが驚きをもつ

て受け止められる。現国王自身も日本に深い関心を持っていたという〔石合 2011〕。

以下、まずはジャナドリヤ祭でのシンポジウムについて簡単に報告。そして、われらが日本館の様子についても言及。加えて、サウジアラビアの文化とイスラームを、素人の視点からだが駆け足で拾ってみる。イスラームもサウジアラビアも、ともに偏ったステレオタイプにはめてみられる対象であるので、多少なりとも視点を補うことを試みたい。

2. 二つのシンポジウム

東日本大震災がわれわれにとってエネルギーの重要性を再認識させたことは言うまでもない。少し前まで、日本では二酸化炭素の排出量を管理するために、火力発電から原子力発電やその他へのシフトに力を注いでいたのだから。サウジからLPガスの緊急支援が決められたことは、深く考えさせられる。

震災には、世界中からお見舞いの言葉、そして祈りが寄せられたが、サウジ国民も震災にたいへん衝撃を受けて心を痛めていた。それで、私たちが当初予定していた日サ関係を語るシンポジウムの他、もう一つ、日本の震災についてのシンポジウムを行うことになった。宗教学者として、私は、宗教界のボランティアの経験を紹介することにした。

震災シンポジウムは、4月17日、プリンススルタン大学で行われた。お話をされたのは、駐日サウジ大使館のトルキスターニ大使、高知県立大学の辻上奈美江専任講師、葛西、東京新聞前編集委員でエネルギー問題ジャーナリストとして経験豊かな最首公司先生というかたちだった。

シンポジウムの内容はワタン紙、オカーズ紙などに紹介されている。左はオカーズ紙に掲載された、プリンススルタン大学での震災シンポの広告。上半分は津波を、下半分は地割れを表現し、震災のイメージを出している。近年、

ジェッダでの洪水など、自然災害に苦慮しているサウジでは、このシンポジウムに関心を持ってくれたようで、200名近い聴衆が参加された。





一方、当初予定されていた日本とサウジの文化交流の進展という主題については、リヤドマリオットホテルの文化シンポジウムの一つとして行われた。左が、オカーズ紙に掲載された記事である。私は、イスラームの碩学として知られてきた井筒俊彦氏の研究を紹介し、それがどのように現代の日本人に受容されているか、現代の日本人に受容されやすかった

事情は何かについてお話した。

井筒氏はイスラーム以前（ジャーヒリーア時代）の文学作品と、イスラーム以後のクルアーンのことばを比較する（共時的構造化、と彼は言う）。彼は、イスラームに焦点を当てるだけでなく、サルトルが人間の自己意識について述べた対自 *pour soi*/即自 *en soi* という図式を引き合いにしながら、この変化が人間にとってもつ意味について考察させる。自己意識を持たない自然状態の創造者と一体の「幸福」と、自己意識を持って切り離された後の根無し草状態とを対比させることをとおし、クルアーンがもたらしたメッセージを日本人の聞き手に実感させることに彼が成功したというのが、私の話の中核の部分である。

会場のポジティブな反応に驚かされた。また、シンポ終了後、あるいは夕食の場で声をかけられ、感想を伝えられた。アラビア語がわかれば、フランス語がわかれば、もっと話ができたであろう。英語やフランス語、スペイン語と並ぶ世界共通語としてのアラビア語に敬意をはらってこなかったことは、とても残念だった。

3. 日本館

ジャナドリア祭は日本にフォーカスすることが決まっていたから、日本館は、関係者がたいへんな努力をして前から準備されていた。在リヤド日本大使館のこれまでの活動を見ると、ビザ発給がなかなか難しい中でも、空手や自動車技術、断食月明けの食事会など、さまざまな交流を継続してきたようすがうかがわれる

(<http://www.ksa.emb-japan.go.jp/j/highlight/index.htm>)。昇る陽、そして枝に散らされた桜の花というシンボルマーク



は、いま見ると別の意味で強く心をゆるがされる。遠藤大使がアラビア語で挨拶を述べている。

以下の写真でご確認頂けるように、日本館には長い列ができた（サウジ人は列に並んで順番を待つという発想があまりないところを、担当者がそのようにインストラクションした、と聞いている）。実はこの列に沿って、被災地のもようを描いた写真パネル（主として避難所周辺で努力する人々が被写体になっている）が並べられ、思いがけない「日本のプレゼンテーション」となった。どれも胸の詰まる写真である。3月の震災から4月のジャナドリヤまで日がなく、なんとかこのパネルだけは整えたということだったが、順番待ちどころかパネルに見入ってしまっているサウジ人の姿には、また、感銘を受けるところがあった。日本の文化や産業紹介を中心とした日本館は、全体として、緊急支援への感謝と復興に向けてのサウジ人への決意表明となったのではないだろうか。



長い列が続く日本館
2011. 4. 18 筆者撮影



列に沿って
被災地からの写真
2011. 4. 18 筆者撮影



夜はステージで
石見神楽の公演
2011. 4. 15 筆者撮影

4. ジャナドリヤ祭からかいまみられる一神教文化



ジャナドリヤ祭のはじまりは国王主催のラクダレースであったようだが、今回もラクダたちが出番を待っていた。ラクダというのはかなり気分屋だという。勝手に走り出したりしないように、どのラクダも前足の一本をあらかじめ曲げさせられて縛られていて、居心地が悪そうに

していた。日本人なら、これから競争させるラクダの足を縛るといふことはしないだろう。このあたり、驚かされる。レースに優勝すれば高級車や金の刀などをいただけるそうだ。ラクダの騎手の多くはスーダンからの出稼ぎだといふ。サウジは多くの労働力を外国人労働者によっており、このことによるデメリットと、メリットが指摘されているが、その話は別の機会にゆだねたい。

ジャナドリアではさまざまなものが展示されていた。以下は民族舞踊だが、私にはどこのどのようなものかは聞き出せなかった。よく見ると踊る男性たちが「？」方の杖をもって、これは、クリスマスにアメリカなどで食べられる羊飼いの杖を模したキャンディを想起させる。キリスト教とイスラーム、という対比をこえて、羊飼いと生業に関わる文化が共有されていることがうかがわれる。右は、その杖を売る子供である。



下の写真は、乳香を売っているところである。売り子は私にサンプルをくれたが、たいへんよい香りであった。聖書などになじんでいけば、乳香や没薬が随所に登場することがおもいだされよう。あ



らためて、世界の主要な一神教が、ほぼ共通の土壌から現れているということが察せられる。

5. サウジアラビア文化とイスラーム

アルコールは飲めない。また、女性はアバヤという服を頭からすっぽりかぶる。男女は厳格に分けられる。ショッピングセンターも、礼拝の呼びかけがあったら、急いでシャッターを閉めなければならぬ（右写真はスターバックス店内から。



慌てて撮ったのでピンぼけしている)。外国人もそれに従わなければならない。商社の駐在などの形でサウジに赴く方々からは、数年間アルコールが飲めないことに対するぼやきも聞かれる。昨今では、女性の参政権を認める発言を国王がする一方⁽¹⁾で、それを揺り戻すかのように、自動車を運転した女性が鞭打ち刑となった(現在、女性が車を運転することは認められていない)。今回のジャナドリヤ祭においても、男性だけ、家族連れ(男性だけでは入れない日となる)と、入場日が分けられていた。

だが、女性が黒だけ、男性が白い服に赤いチェックの頭巾(湾岸諸国の男性に特徴的な服装)の、制服のような装いしかしない、と見るのは、あわてすぎである。それぞれがちょっとした「装い」をしている。以下の写真をご覧ください。女性の室内着は実に鮮やかである(ただし、男性は普通、自分の家族以外の女性のこうした装いを見ることはできない)し、黒づくめのアバヤも、実は黒だけではなく、袖や背中にある刺繍がおしゃれなのである。男性は、たとえば、よーくみると、若い人は、頭巾の巻き方に工夫を凝らしている。



文化情報省レセプションで
美しく装う女性

2011. 4. 15 Al-Jazirah 紙



女性の華やかな室内着
ファイサリーヤのモール

2011. 4. 18 筆者撮影



黒いアバヤの袖にも
美しい刺繍が施された

2011. 4. 18 筆者撮影



襟や頭のアレンジに注目

2011. 4. 18 筆者撮影

滞在中は、文化情報省(日本の文部科学省らしい)や王宮でのレセプシ

ョンがあり、各国からの招待客（大半はイスラーム国からの宗教界の要人）と一緒に過ごした。そばにいと、サウジをはじめとする湾岸諸国のムスリムと、それ以外の国とでは、服装も異なることが自然に目にとまるし、たとえばイランのムスリムとサウジのムスリムとは対照な志向を持つということも自然に実感される。

6. 伝統の保持を示す

6.1 ナショナル・ミュージアム

リヤドにはたいへん立派なナショナル・ミュージアムがある。そこで、イスラームの展示をちょっと見て頂きたい。

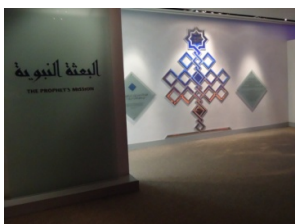


入り口左側にある立派な人物像は国王である。すでに述べたとおり、サウジアラビアの国王は、二聖モスクの守護者 **Custodian of the Two Holy Mosques** という称号をもっている。二聖モスクとは、メッカのカーバ神殿と、メディナの預言者モスクである。聖地の守護者としての彼は、たとえば、200 万人を超える巡礼者がサウジに滞在している期間中の食事などを提供する。あまりにも巨大な「お接待」は、サウジの豊かな石油資源をもってはじめて可能になるもので、四国のお遍路さんへの「お接待」からの連想はしにくいのだが、旅人の不自由に配慮するという出発点は通じるものだ。こうした王族の事績が、ミュージアムのエントランスホールに展示されている。

大学教員は学生が訪ねていける「オフィスアワー」というのもっているが、興味深いことに、サウジの国王にも誰でも会うことができる日というのがある。そこで国民は、さまざまな陳情をすることができる。三日ぐらい、次から次へと来る国民に対応する国王の仕事はたいへんだと思うが、

これは、部族の長としての職責が今なお残されているのだろう。

イスラーム以前と以後について井筒俊彦氏がどのように語ったか、という点に注目してお話しした私にとって、このミュージアムの展示が、イスラーム以前（ジャーヒリア）と以後とを峻別していたのは興味深かった。



イスラーム以前は1階、以後は2階と、エスカレーターで階が分けられている。以前（左写真）は照明

も薄暗いが、以後（右写真）は明るく色鮮やかな雰囲気を目を見張る。預言者ムハンマドの生涯は、下の写真のように横続きの回廊に虹色にプレゼンされている。雰囲気をつかんで頂こうとパノラマ風に撮ってみた。



なお、この日は女性の見学日で、本来なら男性である私（と、同行の保坂修司先生）は見学できなかったが、ジャナドリヤの招待客ということで、30分ほど待って女性たちが退出した後に見学を許された。

6.2 マスマク城址



リヤドがサウジの首都と定められるにあたって拠点となった要塞が、文化遺産となっている。左下写真のように立派な居室もある。現王室のサウド王家がリヤド中心の王家をつくったのは20世紀初頭、この戦争では、馬や剣のみならず銃器もあり、決して優雅な時間を過ごせたわけではないのだろうが。右下写真はアメリカンコミックのような画調のパ

ネル。この要塞にはこの画風はなじまない気もするが、現国王の称号を一枚の絵に端的に表現しようとしているのだろう。



6.3 旧都ディライーヤ



リヤド郊外に旧都ディライーヤの遺跡があったが、現在は大規模な復元工事中であった。写真の通り、立派な城塞・城門が建築中である。遺跡や文化財の復元修復は、いつどの時点のどのような状態を復元するかが議論になるだろう。サウジの旧都復元は、新しい伝統をつくり出していくことを目指すのだろうか。フィリピン人の現場監督は、あと 10 年ぐらしかかるのではないかといっていた。

7. 橋を架ける人々

サウジというのは、多くの日本人にとって、遠すぎる異国だ。だがその異国から、多くの人の手を介して届けられる資源で、われわれは家を明るくし、パソコンを立ち上げ、電車に乗って出かける。石油の「安定」供給というのは、常に変化する情勢に対応し続ける、そうした人々のたゆまぬ努力の結果である。見えざる橋が、無数に架けられているのを目の当たりにした思いだった。

ジャナドリア祭では、レバノン出身のアメリカ人ムスリムに出会った。

彼はロサンゼルス市警に奉職しているが、この大都市の治安維持の努力の中で、ムスリムの貢献の場を手配し、平和的共存に取り組む努力を重ねている。ロサンゼルス市警主催の、治安維持のための宗教間対話の集いというのにでていて、私は7年前に彼に会っていたらしい。

人種間の緊張がしばしば昂まるロサンゼルスでは、1992年春の暴動以後、人種間・宗教間の対話の取り組みを重ねている。7年前にロサンゼルスに住み、担い手たちに聞き取りを重ねる中で、多くの人が口を揃えて語ってくれたのは、「暴動のあとに、最初にムスリムがゴミを拾い始めた」ということだった。

私は、橋を架けられるだろうか。橋を架ける仲間をつくることができるだろうか。

註

- (1) <http://astand.asahi.com/magazine/middleeast/report/2011100100002.html> 辻上奈美江「緊急レポート 6年ぶりのサウジ地方選挙」朝日新聞 Astand、2011年10月1日。

参考文献

- 石合力 2011 5月9日の朝日新聞国際面「風」コラム。
葛西賢太 2011 「国際文化祭の参加者としてみたサウジアラビア」宗教情報センターウェブサイト、<http://www.circam.jp/page.jsp?id=1751>。
辻上奈美江 2011 『現代サウディアラビアのジェンダーと権力—フーコーの権力論に基づく言説分析』福村出版。
中村覚 2007 『サウジアラビアを知るための65章』明石書店。
保坂修司 1994 『乞食とイスラーム』筑摩書房。
保坂修司 2005 『サウジアラビア—変わりゆく石油王国』岩波新書。